



1 玉川さんもかつて働いていた玉川堂の作業場の様子 / 2 玉川さんの作品を覗き込む職人 / 3 若手職人に技術を伝える玉川さん / 4 自宅で愛用している薬罐 / 5・6 金鍔、木槌で成形する様子。写真5で器を引っ掛けているのが鳥口 / 7 若い頃に製作した思い出の作品 / 8 木目金の斑紋模様 / 9 数種類の金属板を重ね溶着した木目金の元となる塊 / 10 写真9の塊を機械ハンマーで打ち延ばし、木目の模様を出したもの / 11 つばめっ子かるたでも紹介されています / 12 自宅の工房にて作業する玉川さん

玉川さんは、燕で200年の伝統を持つ玉川家に13歳の春に移籍。以降、鋳起銅器職人として、試行錯誤と鍛錬の日々の中で鋳を振るってきました。

燕の鍛金の技術を引き継ぎ生み出される作品は、鋳で作られたとは思えない程の美しさと繊細さで、見る者を魅了します。また、玉川さんの代名詞とも言える木目金は、鍛金技術において難易度の高い技法のひとつとして知られている反面、明治以降の魔刀令^{まがとうりょう}によって途切れかけた技法でもあります。「木目金」との出会いは30歳の頃、「板金」ではなく「塊」の金属から作品を打ち出すその制作段階に、鍛金家の原点を求め、取り組んだことが始まりです。それから50年弱。玉川堂から独立後も自身の工房を構え、木目金の復興と発展に邁進してきました。

その卓越した技術は、日本国内に留まらず海外でも高い評価を受けており、78歳となる現在に至るまで圧巻の作品の数々を生み出しています。

「木目金について」

木目金とは、異なる数種類の金属板を何十枚も層状に積み重ね、溶着した金属塊を板状に延ばし、その表面を削ることで模様を作り、打ち延ばしていく技法です。この時にできる斑紋模様が、木目のように見えることから木目金と呼ばれます。銀や銅の合金を総称して色金^{いろがね}といい、その魅力を十分に具現することができ、更に一枚一枚の厚みの変化、組み合わせの変化によって多種多様な斑紋を作り出すことができます。国内外にいる作家の中でも、玉川さんは、木目金技術の第一人者として技術を継承してきました。

※2 彫金^{たがね}：鑿（鋼鉄製の金工用の小型のみ）を用いて金属に文様を打ち出す技法

「鋳起銅器について」

鍛金は彫金、鑄金に並ぶ金工技術の1つであり、金属の展性や延性を利用して加工し、工芸品を作る技法です。

燕の鋳起銅器は、約200年ほど前から鍛金技法のひとつである鋳起によって製作が行われてきました。これは、一枚の銅板を金鍔や木槌を用いて打ち延ばしたり、打ち締めたりしながら器を作り上げる技術です。

例えば、ひとつの薬罐を製作するだけでも小ささまざまな金鍔、木槌を使い分けます。さらに、成形時に銅器を引っ掛ける鳥口という道具（当て金）だけでも30種ほど必要とします。また、銅は叩くと硬くなるので、火の中で柔らかくする「焼き鈍し」を繰り返しながらの作業となります。その後、着色や艶出しなどの工程を経て完成します。

※3 鑄金：溶解した金属を鑄型に流して成形し、表面を研磨するなどして仕上げる技法

「玉川 宣夫」

今年、玉川宣夫さんは、「重要無形文化財『鍛金』保持者」（人間国宝）に認定されてから10年の節目を迎えました。それを記念し、燕市産業史料館で、特別展を開催します。

今号では、玉川さんを語る上で欠かすことのできない鋳起銅器と木目金、そして人間国宝認定10周年を迎えた玉川さんについて紹介します。

※1 鍛金：金属の変形する性質を利用し、金鍔などで打ち延ばしながら成形していく技法